

# GRAZIE

“グラツィエ”

冬・春号

“グラツィエ”とはイタリア語で“ありがとう”的意味。陽気なラテン民族の言葉に倣って、素直に感謝の言葉を口にできる明るい場作りを、本学科は心がけています。

## 特集 フィールドワークへ行ってきました

### ●国際コミュニケーション学科

### フィールドワーク一期生達からの体験報告 「次は、どのプログラムに参加してみる?」

国際コミュニケーション学科では現場での体験学習を単位として読み替えする制度を設けています。

無事にフィールドワーク実習を終え、事後学習をした学生達から集められた声を、一部抜粋してお送りします。



#### 【アジア学院】

期間:2006年8月7日~9月14日の間で、二週間以上 (授業を取る時期、期間は学生の意思による)  
場所:日本・アジア学院 担当:毛利先生

アジア・アフリカの人々と寮で共同生活をしながら一緒に農作業。  
自給自足の暮らしはどういうものかを体験してみよう

アジア学院で過ごした2週間の一日一日が私にとって今までしたことのない大きくて貴重な経験となりました。学べたことは命の大切さ。アジア学院では食事をする前にみんなでお祈りします。最初は何なんだ?と思ってましたが、「いただきます」とは「命をいただきます」という意味だということを、時間とともに理解できるようになりました。アジア学院に行く前は、肉料理が出てきても何も考えずに食べていたけれど、アジア学院に行って、私たちが生きるために多くの動物たちの命を奪っていることを実感することができました。(I)

アジア学院での生活は、農業指導者になるという目標を持った人たちがたくさんの国から来ているため、みんな農作業や勉強にもとても熱心でした。みんなとってもフレンドリー。中でも一番実り多かったのが、夜の時間でした。なぜって、たくさんの人がいるためにその国の話が聞けるから。未知の世界の話を聞くことをきっかけに、コミュニケーションを取れるようになりました。(S)



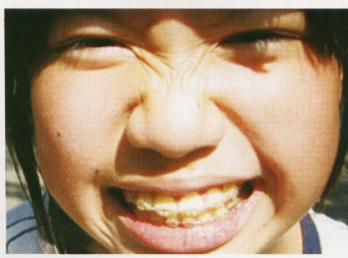
#### 【サマースクール】

期間:2006年7月31日~8月6日 7日間  
場所:日本・明星大学内 担当:田中先生

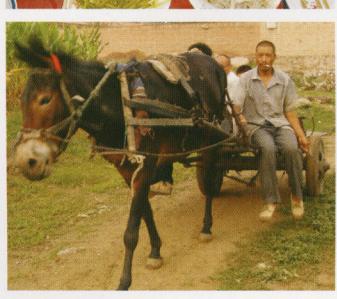
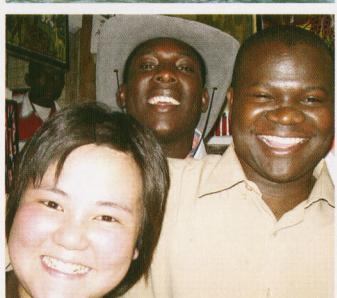
世界中から集まった国際ボランティアと一緒に、学生が学生の手で運営する英語スクール。英語教員を目指す人のためのプチ実践授業をしてみよう

今年も国際ボランティア達は、皆やる気一杯で海外から参加してくれました。私が属したチームの目的は、サマースクールの期間中、できるだけ多く、実際に英語を喋る、使う機会を子供達に与えてあげることでした。それによって、子供達も「英語が実際に機能する」ことを実感でき、喜べば、その分、国際ボランティア達がサマースクールに参加する意義が大きくなつて、モチベーションも高まると思ったからです。

実際、うれしいことがありました。ある日、小学生の男の子が、国際ボランティアに何か贈り物をあげていたのです。授業中ではなく、お昼ご飯の後だったのですが、その時その男の子は、英語を喋っていました。彼にとって、英語を喋ることがどの程度難しかったのかわかりませんが、国際ボランティア達が子供たちに与える英語への意欲、刺激、モチベーションは、私たち日本人が与える事の出来るそれよりも、より大きいものであることを感じました。(S)



<http://www.meisei-u.ac.jp/dpt/International/>



## 【カリフォルニア州立大学サクラメント校】

期間:2006年8月14日～12月8日 2セッション(授業を取る時期、期間は学生の意志による)  
場所:米国・カリフォルニア州立大学サクラメント校 担当:深田先生

### 大学内に設けられた語学学校で英語をブラッシュアップ。同じく英語習得を目指す、他国の人々と、机を並べて勉強してみよう

私がサクラメントで行なわれるフィールドワークのクラスを履修した一番の理由は、サクラメントという土地にありました。以前からアメリカとその文化、特に映画などのエンターテイメントに興味があったので、サクラメントという街に魅力を感じていたからです。フィールドワーク期間中に、特に他の学生の意識を直に聞くことが出来たのはとても貴重な事でしたし、インタビューなどを通して、自分の今後の進路・目標について視野を広げて考える事ができるようになりました。今回得た刺激と新しい観点は工夫次第で今後の糧になるものだと感じ、得たもの全てを、余すことなく今後の人生・生活に生かしていきたいです。(M)

カリキュラムの中で、学生、教師、両方の立場に自分が立って、データを収集するプログラムが印象に残りました。それによって、双方がどのような気持ちで授業に取り組んでいるかを感じることが出来ました。語学学習において、学んでいる言語を使って話すことがいかに大事であるかを改めて認識したことも大きな収穫だったと思います。将来、自分が教える立場となった時は、自分がしてもらって良かった事、逆効果だった事などの経験を十分に生かしていきたいと思います。(A)

## 【ザンジバル】

期間:2006年9月2日～13日 12日間  
場所:タンザニア・ザンジバル島 担当:菊池先生

### 様々な文化が混在するアフリカの不思議の島ザンジバル。多種多様な文化が共存する人種のるつぼで、彼らの文化を体感してみよう

ザンジバルへ行って、コミュニケーションに大切なのはお互いに理解し合おうという気持ちだということを感じました。上手く英語が通じなくても、身振り手振りで伝えることができ、相手の表情や口調などから相手の言わんとしていることを理解することができました。人種や言語が違っても分かり合うことは可能だというのが一番の発見。この10日間は、日本での同じ繰り返しの生活とは違い、常に新しい発見や出会いがあり、毎日がとても新鮮に感じられ、有意義で生涯忘れない最高の思い出になりました。(T)

ザンジバルでの食事はおいしかったのですが、注文をするとたいてい1時間以上経ってから料理がてきて、そのゆっくりさに驚きました。ザンジバルの人達は「pole pole(ポレポレ)=ゆっくりゆっくり」という言葉をよく使っていて、その言葉通りザンジバルには日本の時間の流れ方とは違う、ゆったりとした時間が流れています。今回なにより痛感したのは笑顔と挨拶は大事だということ。現地に行く前は少し恐怖心があったけれど、ザンジバルの人達が「ジャンボ(こんにちわ)」と笑顔で迎え入れてくれ、とても安心したし、嬉しかった。挨拶は基本だけれど、1番大切なコミュニケーションだと思いました。(K)

## 【中国・大同】

期間:2006年8月4日～12日 9日間  
場所:中国・山西省 担当:池本先生

### 地球環境をいかに維持していくかということは国境を越えた問題。厳しい自然環境の中で現地の人と共に植林活動をしてみよう

現地に行く前は、雨が少ない土地ということで、サハラ砂漠のような砂が一杯の所を想像していたのですが、実際には木を植えても育ち難い土地などと知りました。今まで、テレビなどで外国の映像を見ても、「別世界」としか感じなかったのが、実際に行った事によって、「自分とは無縁の別世界」とは思えないようになり、NGO関係の仕事を初めて体験して、その厳しさを実感しました。このフィールドワークでの経験を生かして、NGO関係や国際社会で働くような仕事を目指していきたいと思います。(H)

道路は、栄えている街中はある程度舗装されていましたが、少しでも街から離れた田舎に向かうと、舗装はまったく皆無で、道路の真ん中に亀裂が走っているのは当たり前。多少のデコボコや穴はそこら中にあり、真っ直ぐ走ることもま办ならない中、車内はちょっとしたジェットコースター状態でした。外見がこんなにも似ているのに、生き方がこんなにも違う世界へ行き、国が発展することの大変さ、素晴らしいを、身をもって体験しました。(T)

## こんなこと、やりました! 9月▶3月編

### 11/25 JCCP(財)国際石油交流センターの研修生がやってきた

JCCPはコスモ石油(株)が中心となって、産油国の石油会社で働く管理職クラスの人に、日本型システムなどを学んでもらう活動をしています。今年も田中先生と有志の学生らが、日本の文化・考え方を吸収しようとする研修生(イラン、カザフスタン、パキスタン、イエメンなど)を温かくもてなしました。企業におけるビジネス英語のカリキュラム開発を手がける田中先生が、バブル前と後での日本の失業率の話をすると、就業人口より失業人口の方が多い国から来た研修生は「我々の国と比べたら日本の失

業率の増加なんて、心配のうちに入らないよ」と感想を述べ、笑いを誘う場面も。学生たちはアラブ圏出身者(イスラム信徒)のために、昼食に「豚肉」が入らないよう事前交渉に奔走したり、昼食後のお祈りの時間のために、応接室の一角に、聖地メッカの方向を示す大きな"→"マークを床に用意したりの大わらわ。この交流によって研修生と本学科の学生たちは、お互いに心地よい刺激を受けた様子でした。



### 12/10 明星英米語学文学会 第22回総会・大会が開催されました

第一部は学科教員による座談会。各教員がどうして今の道に入るようになったかをテーマに、学生だけでなく同僚教員にとっても興味深い内容となりました。「外資系銀行でOLをしていたのですが、興味があった分野をもう一度勉強したくなつて大学教員への道を…」と語るT先生。「『大学へ行ってステキな子と出逢いたいから、俺は大学を受験する』と宣言した悪友に刺激されたという、結構単純な理由が学術の道に入ることになったきっかけです」と語るH先生など、ざっくばらんな座談会とな

りました。第二部はポスターセッション。大学院生、卒論準備中の学部4年生、フィールドワークを終えて帰ってきた2年生らが、自らの体験、研究をポスターにまとめて発表。締めの第三部は、アメリカ演劇がご専門の常山菜穂子さんによる御講演。現在は高尚な文化とされるシェークスピア文学も、19世紀のアメリカ人達はシェークスピアの名言をアメリカナイズし言葉を遊ぶという感覚で、大衆文化として受け入れられていたという話に、学生たちも興味深げに聴き入っていました。



### 1/12 英字新聞"THE DAILY YOMIURI"に、深田先生のコラムが掲載される

"Why chatting is part of learning(おしゃべりは学びの一部)"が記事のタイトル。「日本の英語学習者にとって、実生活の中で英語を話す機会をできる限り多く持つことが大切」であり、「授業の内外、また話相手がネイティブかどうかに関わらず英語でのコミュニケーションを多く経

験すれば、英語学習が『学校の科目の一つ』ではなく、世界がより広がることにつながるということを実感できる」という深田先生の持論が、読売新聞の英字版に掲載されました。

### 2/3 入学前教育に約60名の高校生達が参加

推薦入試またはAO入試で既に入学を決めた高校生達約60名が、学科主催の「入学前教育」に集まりました。この入学前教育、実際に現場を取り仕切っているのは全て、現役の学生達。異文化コミュニケーションコースと、英米文化・文学コースに属する現役の学生らが模擬授業を行い、学科のテーマである『コミュニケーション』の極意を披露しました。お

互い見知らぬ者同士。初めて出会う教員と先輩学生。そんな高校生たちの緊張を『コミュニケーション』の方法論を国内海外で実践的に学んできた学生たちが見知らぬ者同士の間に立ちはだかる壁を見事に壊していました。「この学科はとっても楽しいところだから、早くおいで、待ってるよー!!」。現役大学生が高校生の後ろでピースサインを見せっていました。



## 覗いた オモシロ授業

コレハオモシロイ!  
そんな授業を  
学生記者が  
体験レポート

今回は深田先生の「言語コミュニケーション」の授業にお邪魔してきました。

コミュニケーションとは何か、という誰もが知っているようあまり知らない「コミュニケーション」という機能そのものを、様々な角度から考えていくという授業です。深田先生は、専門的な理論や用語を、パワーポイントを使いながら分かりやすく、時にはギャグを交えながら説明します。特にパワーポイントの解説に現れるネコやタコが、思わず吹き出してしまうようなツッコミを入れる場面もあり、とても楽しく学べる授業という印象を受けました。さらにこの授業の特典は、先生のホームページ上で、授業で使用したパワーポイントを見られること。家に帰ってもう一度復習することができるのが利点です。

言語コミュニケーションを受講すれば、口下手な人もコミュニケーションの達人になるかも!?(K)



## 学科事務室は どんなとこ?

学科を陰で支える  
事務室には  
どんなスタッフがいるの?

国際コミュニケーション学科事務室では学生の成績や学生生活、留学に関する事など、学科に関する様々な業務を行っています。そんな仕事に従事するスタッフを、事務室アルバイターが一刀両断してみました。

◇関根さん：学科に関する全ての業務を行っている国際コミュニケーション学科の頼れるお姉さん。何でもできる素敵なお姉さんの笑顔は学科の癒しでもあるのでした。

◇谷口さん：留学に関する全般的な事を担当している、Mr.ダンディズム。親身になって留学相談をしてくれる。留学を考えている皆さんは今すぐ谷口さんに相談に行こう。

◇白川さん：学科ホームページの更新や学科のパネル作成など、アーティスティックな作業をさりとこなす学科のリーサルウェポン。明るい笑顔を振りまながら素敵な作品を量産しています。

3名のスタッフ+3名のアルバイトで構成されている事務室。海外経験豊かな面々が揃っているので、ぜひ気軽に声をかけて下さい。(K)



## 私達の 施設自慢

他大学には絶対に  
ないに違いない  
特筆すべき施設とは?

国際コミュニケーション学科の活動を陰で支えているのが、この“国際教育センター”。海外留学経験豊富なスタッフが揃ったこのセンターでは、海外へ留学する学生が安心して生活できるよう、週に一度定期的に連絡を取り、あらゆる相談に乗っています。

「学生を見ていると、自分が留学していた頃に重なるんですよね」とスタッフのKさん。「ロンドンに留学していた学生が、ある時ホームシックにかかり、ステイ先の外から泣きながら家に電話をしていました。その時またま前を通りかかったおばあさんが、「人生の主役は“あなた”なんだから」とポケットに入っていたあめ玉を一つ手に握らせて励ましてくれたという話に、私も思わずじーんとしてしまいました」。

「羊の出産に立ち会いました」「ホストファミリーが私のために服を買ってってくれました」。そんな些細な現地報告を聞くのが仕事の励みと語るSさん。「留学は数十万かかるけど、何百万何千万の価値があります」。留学を控え不安な表情を見せる学生を前に、教育センターのスタッフたちは「留学は本当に楽しいよ!!」とポンッと背中を押し続けています。



## Wanted

### 学生編集スタッフ募集中!

将来マスコミの仕事をしたい人、またはイラストなどで自己表現をしたい人、記事を書きたい人など常時募集中。企画段階から実際に形にしていくまで、全て自分で体験できるので、とてもやりがいがあります。積極的な参加をお待ちしています。

### これは是非載せて欲しい!の記事&情報大募集

“GRAZIE”は、学生のみなさんと作っていくメディアです。より充実した内容にしていくために、どんな些細なことでもネタをお待ちしています。

[応募先] 〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 明星大学国際コミュニケーション学科  
Tel 042-591-5329 または muisjimu@eleal.meisei-u.ac.jpまで

## 気になる あの子に インタビュー

どんな子が何を  
しているのかな?

つい先日、オーストラリア・フリンダース大学におよそ11ヶ月の長期留学をしていた落合若菜さんが帰国。

「留学生活はめっちゃ楽しかったですよ!」と現地での模様をパワフルに語ってくれました。「韓国人、チリ人、ブラジル人、中国人と一緒に勉強していたので、一気に世界が広がりました。中でもオモシロいなと思ったのは、出身国によるモノの考え方の違い。例えばホームパーティーなんかがそうです。ホストがブラジル人だった場合にはパーティー開始時刻がたとえ20時だったとしても、彼らの時間感覚って本当におおらかで、実際に始まるのは24時(笑)。パーティーの内容も、歌って踊って喋って、用意されたものを食べて、とっても賑やかです。けれど、それが韓国人に招待をされた場合にはちょっと違う対応をします。一品持参するか、30分くらい前に行って一緒に料理を手伝うのが常識。日本と似ていますよね。」

明星大学内で行われている、子供達向けの英語塾に復帰して教える姿も、自信に満ち満ちた様子。「今度は語学留学という形を卒業し、さらにレベルアップした形で現地に暮らしてみたいですね」と、意欲はさらに向上している様子でした。



### 「編集スタッフの呟き」

グラツエがでて二年目。最初は目を白黒させながら作っていたのだけれど、やっと大学の一年の流れもわかるようになってきた。三月の今、大学はお休み中。静かな事務室にカタカタとパソコンの音が響いている。